



2014 年 (平成 26 年)
2 月号 (No. 825)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

中国四川省横断山脈登攀隊報告	1
韓国山岳会会長 全炳九(イ・インジョン)氏に聞く	4
札幌・北大山岳館の紹介	5
冬山雪崩対策講習	6
第 3 回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」に 高野秀行著「謎の独立国家ソマリランド」	7
富士山におけるスラッシュ(融雪)雪崩と、 スラッシュ現象による大量山岳遭難事故	8
追悼 一力英夫君を偲ぶ	9
東西南北	10
20 もの研究発表、「防虫」と「身体と 心」の講演が好評だった研究大会	
活動報告	11
図書委員会／集会委員会 アルパインフォトビデオクラブ	
支部だより	13
越後支部／四国支部	
図書紹介	14
新入会員	15
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20 時
水・金 13~20 時
第 2、第 4 土曜日 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 10~18 時

中国四川省横断山脈登攀隊報告

慶應義塾大学体育会山岳部プロジェクト 100 濱田 豪

昨年、当会の海外登山助成金を受け、慶應義塾大学体育会山岳部プロジェクト 100 により、中国四川省の四姑娘(スークーニヤン)山群の未踏峰・未登攀の岩峰・岩壁への挑戦が行なわれた。そのレポートを、濱田豪さんからいただいたのでご紹介する。

本登攀隊は、2013 年 8 月 1 日(木)から 10 月 20 日(日)にかけ、A、B、C の 3 隊に分かれ、中国四川省横断山脈・四姑娘山群の岩峰、岩壁に挑戦した。各隊の登攀結果はそれぞれであったが、プロジェクト全体としては、一定の成果を挙げる事ができた。

3 隊に分割したのは、参加メンバーの休暇の都合によるものだったが、結果として各隊で目指すスタイルや対象を選定して登攀活動をしたことにより、各隊とも満足

度の高い遠征となった。

今回挑戦した四姑娘山群は、中国四川省を横断するように位置し、「四姑娘」の名のとおり 4 つの美しい峰々が連なっている。図のように、A 隊と B・C 隊は少し離れた位置に B、C を置いた。

A 隊 4 つの未踏峰に初登頂
メンバー・森上和哲(隊長)、
互井健悟、木村友輔、
長野健吾

A 隊は 2013 年 8 月 1 日(木)から 25 日(日)にかけて滞在し、双

橋溝にある 4 つの峰に挑戦した。全期間を通じて天候に恵まれ、小さなピークを含めて 4 つの未踏峰に初登頂することができた。命名も、A 隊により次のとおり成された。

- ① 好棒啊峰(ハオバンガー・フォン) 4870 呎 / 8 ピッチ / 27 5 メル / 5・8
- ② 獅子峰(スーズー・フォン) / 5057 メル / 13 ピッチ / 5・10 c
- ③ 鳳凰峰(フォンファン・フォン)

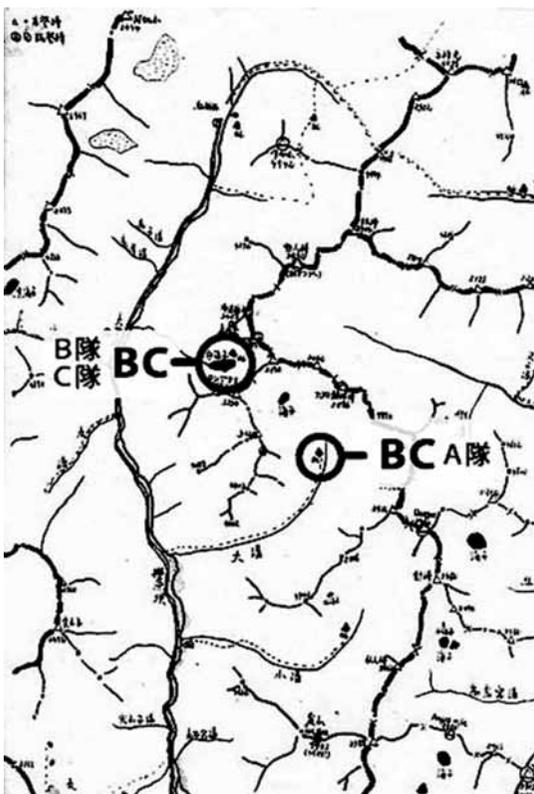


図 1 四姑娘山群 山城概要

／4984ピッチ／7ピッチ／340ピッチ／5・10 a

④小峰(シヤオ・フォン)／4785ピッチ(クラス4、ロープは使用せず)

④は歩いて登る山であったが、①～③はロープを使用してのクライミングによって登頂した。最大の成果は②獅子峰で、13ピッチ、570ピッチを登攀しての初登頂となった。

8月3日、森上と長野が双橋溝大溝に上山し、およそ4000ピッチの地点にBCを設営。周辺の山を観察した結果、主たる目標としてきた5120ピッチは落石の危険が大きいため、他の目標を探すこととする。森上の高山病のため一時下山を強いられたが、その後、大溝と長坪溝との間にそびえるピーク(好棒啊峰)を長野と登攀し、8月9日に登頂することができた。

次に5120ピッチから続く稜線



好棒啊峰3P目をリードする森上隊長

上のピーク・獅子峰を狙い、3回目のアタックで8月15日に森上、互井、木村が登頂することができた。また獅子峰から大内ピーク(仮称)に連なる稜線の鳳凰峰は、ワンプッシュで8月19日に森上、互井が完登した。

さらに長坪溝側を偵察した際、小さなピーク・小峰を8月21日に登頂した。

以下、ロープを使用した3つのピークで、登攀中の中間支点にはカム、ナッツ、ピトン、スリングを使用し、前進用ボルトの設置は行なっていない。

下降用支点も同様にカム、ナッツ、ピトン、スリングを用いた。ただし獅子峰のみ、持参した電動ドリルを用いての下降支点用ボルトを13ピッチ中、10ピッチで設置した。同じく獅子峰のみ、フィックスロープを使用した。

以下、隊長・森上の所感である。「様々な好条件により、事前には予想しなかった成果が残せたと感じている。事故なく全員が無事下山すること、これが達成できたことは隊長として素直に嬉しい。

上山時、未登の岩壁をトライする覚悟に欠けている自分がいた。

焦りなどから、高山病による一時下山という事態につながり、長野には迷惑をかけてしまった。幸い余裕ある日程で徐々に心身ともに調整していくことができた。

3つの登攀が完遂できたこと、すなわち学生の長野との好棒啊峰への登頂、A隊4名それぞれの持つ力を結集しての獅子峰への完登、互井と2人で肩肘張らずに登った鳳凰峰、それぞれに嬉しくありたいことだ。

ただ、3プッシュでの完登、フィックスロープの使用、ボルトキットの持参および下降用ボルトの設置など、獅子峰への登攀スタイルについてはパーティとしての実力を反映している。

いずれにしても、山の中で余裕を持って判断、行動し、充実したクライミングを実践できたのは、目的意識の明確なメンバーに支えられたおかげで、互井、木村、長野の3名には感謝したい。

B隊 2つの岩壁を継続登攀

メンバー・小野寺賢治(隊長)、兼原慶太

B隊は8月31日(土)から9月22日(日)にかけて滞在し、双橋溝にある「老鷹岩」の下部岩壁(未登攀)、



獅子峰のスラブをリードする互井隊員

および上部岩壁(既登)の継続登攀を行なった。

A隊が帰国した直後から悪天周期に入り、9月11日まで2週間以上、不安定な天気が続いた。気温も低く、夜の降雪では雪線が4000ピッチまで下がる日もあった。しかし12日から好天周期に入って気温も上がり、融雪が進んだ。13日には、高度順応をかねて牛心山東面を登攀した。しかし第一候補としたポタラ西壁は壁の雪が十分溶けず、断念。南面で雪の影響が少なく、壁のスケール、傾斜もある「老鷹岩」に焦点を定めた。

15日に白海子のBC入りし、翌日からアタック。双橋溝の車道からBCまでは2時間半の行程。悪天期間はかなりの積雪があったが、我々がBC入りしたときは完全に

溶けていた。好天周期とはいえず、アタックした16、17日は若干天候が不安定で、ビバーク時に雷雨に遭遇。19日、BC撤収時も雨に見舞われた。

老鷹岩下部岩壁は、高差400m、8ピッチ。登攀ラインは壁のほぼ中央で、逆「く」の字状にコーナー、フレーク、クラックが続く弱点を衝いたライン。上部からの落石、降雨時は流水が集中するが、傾斜が強いため登攀ラインに直接は当たらない。

中間部は快適だが、下部のコーナーは濡れており、また上部スラブ帯のクラックも草付で埋まっているため、ランナウトを強いられる。壁を見上げ、必要ないと判断し、ボルトキツはBCに置いて行ったため、アンカー含めてボルトは打たなかった。

上部岩壁は高差700m。緩傾斜とバンドを経由し上部岩壁の中間地点へ、そこからヘッドウォールを登る。ヘッドウォールは、数日前に中国ペアが登ったラインを採る。ブレイ点にボルトが打たれており、使用する。

下降はヘッドウォールを同ルート、中間地点からリッジおよびリ

ッジの右側を下降。ピークから上部岩壁基部まで計11ピッチのラッセル。下部岩壁は初登、したがって下部岩壁から上部岩壁への継続も初登である。

所要時間は以下のとおりである。
9月16日/BC6:00↓下部岩壁登攀7:00~16:00↓中間バンド・ビバークポイント17:30。

9月17日/ビバークポイント7:30↓上部岩壁登攀10:30~14:30(老鷹岩ピーク)↓BC18:00。

以下、隊長を務めた小野寺の所感である。

「ここ数年、アルパインクライミングから離れていた。未登のビッグウォールへの希求は、いつしか淡い夢になりかけていた。ところ



BC帰着後、上部岩壁をバックに

が思いがけず、ルーム1000周年の遠征計画が持ち上がり、夢を叶えるチャンスがやって来た。遠征メンバーが決まり、ミーティングを重ね、トレーニングに精を出すうちに、着々と現実の目標となっていた。

現地に着着すると予想以上に素晴らしい壁とラインに巡り会い、一方天気は想定外の悪天続きで、目前にした目標が日々遠ざかることに焦りを感じた。

日程も終盤に差しかかったところで、ようやくやってきた好天を捉え、理想的なスタイルで完登し、自己のクライミング歴の中で最も印象に残るものとなった。

そしていま、自分の中にビッグウォールへの情熱を再び感じている。

C隊 新ルート開拓を目指すも、悪天候に阻まれる

メンバー・濱田豪(隊長)、

千葉明夫

C隊は、10月5日(土)から19日(土)にかけて、B隊と同じBCに滞在した。現地に着着したときには、すでに山域全体が雪化粧している状態であり、登攀対象が限定された。B隊が初登攀した老鷹岩

下部岩壁は傾斜が強く、南面であることから積雪がなかったため、C隊は同岩壁に新ルートを開拓することを目指した。

前半は好天が続き、10月11日から12日にかけて5ピッチ250m登攀し、さらに10月14日、悪天の中、もう1ピッチロープを延ばしたものの、天気は回復することなく、完登まで2ピッチを残し、時間切れとなった。

以上が、中国四川省横断山脈登攀隊の報告である。今回の遠征に多大なるご支援、ご助力をいただいた日本山岳会には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

『山岳』の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百九年(2014年)の発行は、第百八年と同じく6月下旬を予定しております。原稿締切は4月10日になりますが、会員の皆さんからのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、編集委員会に一任させていただきます。

できればメールでのご連絡、ご出稿をお願い申し上げます。締め切りは4月10日です。

[送り先] 〒274-0073船橋市田喜野井2-1-4 節田重節

☎047-476-1273 ✉j-setsuda@ray.ocn.ne.jp

(『山岳』編集委員会委員長・節田重節)

Interview

韓国山岳会会長

全炳九(イ・インジョン)氏に聞く

萩原浩司

昨年11月、ピオレドール・アジアの審査会でソウルに招かれた際、「人と山」社の洪錫夏(ホン・ソクハ)社長の取り計らいで韓国山岳会の会長、イ・インジョン氏(71)に話をうかがう機会を得た。

イ・インジョン氏は1970年代にチューレン・ヒマールやアンナプルナIV峰の遠征隊に加わるなど、登山家として活躍。その後、登山用具の輸入代理店「アンナプルナ・カンパニー」を立ち上げ、現在ではペツルやブラックダイヤモンド

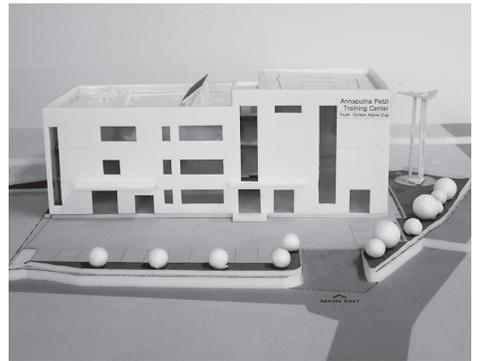
ンド社など海外ブランドの輸入販売をされている。

韓国山岳会は1945年に創立。現在では5500人の会員を擁し、12の支部を持つ。

会員の高齢化が進んでいるのは当会と同じ傾向のようだが、2010年にイ・インジョン氏が会長に就任されて最初に手掛けたのが、ユース・コリアン・アルパインクラブ(YCAC)の立ち上げだった。

「パソコンにばかり向かっている若者たちに、外に出る機会を与え、山の素晴らしさを伝えたい」との思いから、就任以来、学生を応援する様々な企画を立案、実施してきた。

YCACは学生会員によって構成されている。韓国山岳会の年会費は25歳以上が一人10万^{ソウ}(約1万円)だが、学生は無料。そして、同じ学生でも、所属するクラスによってシンボルカラーが定められているのが特徴だ。



4月竣工予定のYCACトレーニングセンターの完成模型

YCACのロゴ入りの会員証も、小学生は緑、中学生は黄色、高校生はオレンジ、大学生は青を地色に用い、区別している。ちなみに一般会員は赤で、指導資格を持つメンバーは白い縁が付いたロゴにInstructor(インストラクター)の文字が入る。これは、それぞれのクラスへの帰属意識を高めるイメージ戦略と理解できなくもない。

若年会員の登山に対するサポートも積極的だ。近年では高校生のクライミングチームでアイガーやヨセミテに出かけるなど、海外登山への支援も行なっている。

また、毎年7月には白頭山の山脈縦走を通して北朝鮮の登山者との交流を図っている。1週間前後

の合同山行プログラムに、小学生から大学生まで約500人もの参加者が集まるという。こうした企画の立案と支援の背景には、「登山は若者の健全な人格形成に寄与する」というイ会長の理念が働いているといえるだろう。

そして現在、イ会長が目指しているのは、ユースクラブの会員が集まれる「場」を造ることだ。

ソウルから車で約1時間の地に、60億^{ソウ}(約6億円)をかけて550坪のトレーニングセンターを建てる計画が進められている。

クライミングウォールと会議室を併設した施設は、レスキュー訓練やクライミング講習会などの使用を考えて設計されており、4月の竣工を目指して建築中とのことだ。

今年で2期4年の任期を全うされるイ会長だが、「韓国登山界の将来のためにも、若者を育てるトレーニングセンターは必ず完成させる」と熱く語っていた。



自ら撮影したパタゴニアの写真の前で



Museum

札幌・北大山岳館の紹介

北海道大学山岳館運営委員会 小野寺弘道

北大山岳館は、北海道大学キャンパス北西端の原生林に囲まれた静かな場所に建つ、山小屋風のログハウスです。

北海道大学山岳部が創立70周年を迎えるにあたり、山岳部OB組織である「北大山の会」が記念事業の一環として1995年に建設し、北海道大学に寄贈しました。建物の保守は北大当局が行ない、日常的な管理運営は山岳部と山の会が選任した山岳館運営委員会が行なっています。

建物は2階建てで床面積は2200平方メートルあります。1階部分には集会室、図書室、閲覧室、給湯室、水洗トイレなどが配置され、2階部分にはクラブルームと天窓のあるロフトがあります。

集会室は50名ほどを収容できる広さで、頭上吹き抜けになっていますので開放感があります。主に学内の学生サークルが集会やセミナーなどに利用しているほか、これまで山岳館主催の講演会を6

回開催しており、学内外から多くの方々が参加されています。山岳館主催の講演会は、年に1回程度の開催を計画しています。

図書室には、北大山岳部が創立された26年以來、収集・保有してきた貴重な国内外の山岳、探検に関する図書や地図等を整理・保管し、山岳館建設以降は、内外から寄贈あるいは購入した新たな図書を加え、収蔵しています。開架式で一般公開もしており、貴重書と雑誌類以外は、一般への貸出もなっています。和書・洋書が約4200冊、部報・会報・和洋雑誌が約320誌、国内外の地形図(旧版地形図含む)が約1030点収蔵されています。

閲覧室のパソコンからは、収蔵図書や資料のほかデータベース化された7000枚を超える映像を検索することができます。この映像データベースは、山岳部創立80周年記念事業として山岳館が主体となって、山岳部・山の会関係者

から収集した内外の写真から選択し、2年をかけて収録したもので、現在も適宜追加しています。

クラブルームには、山岳部創立以来のノート類、各種計画書・報告書、書信、山小屋(ヘルヴェチアヒュッテ、空沼小屋)日誌、アルバムなどの歴史的資料が保管されています。

ロフトは会話や休憩、あるいは読書するのに適したスペースとなっていて、壁面にはスキー、ピッケル、アイゼンなどの山道具が展示されています。

山岳館は建設以來、北大の課外活動施設の一つとして、登山、探検、地球環境保全、途上国援助などに関心を持つ学生たちに会合の場を提供し、大学内外の先達・先輩たちとの意見交換の場としても利用されてきました。

運営委員会では、これまでの利用者だけでなく、さらにより広く外部に山岳館の存在と活動内容を知っていただき、有効活用をしていただくよう努めています。また、博物館としての機能も強化していきたいと考えています。

山岳館は、毎週水曜日と土曜日の午前10時から午後4時まで一般

公開しています。この日は運営委員が常駐して来館者の対応に当たっています。

山岳館は北大正門から徒歩で約20分の所にあります。経路がやや複雑なので、正門に入つてすぐ左にあるインフォメーションセンター「エルムの森」で「キャンパスガイドマップ」(無料)を入手することをお勧めします。

札幌にお出かけの折には、ぜひお立ち寄りください。



北海道大学キャンパス内の原生林に建つ北大山岳館

Lecture 冬山雪崩対策講習

理事 山田和人

YOUTH CLUBでは、2014年1月25日～26日に国立登山研修所において冬山雪崩講習を実施した。

講習生は、東海支部、四国支部、広島支部、石川支部、青年部、学生部から18名が集まった。平均年齢30歳代の青年層である。

1日目は、9時に開会式の後、まず「雪崩回避と雪崩捜索について」というテーマで座学を実施。積雪、そして雪崩とはどういうものか、回避のための考慮事項等を学んだ。その後体育館に移動して怪我人

の搬送に必要なツェルト梱包実技及びビーコン操作の基礎を学んだ。

午後は、いよいよ積雪フィールドでの実習である。雪崩捜索基礎では、シヨベル操作、V字コンベンアームソッド、プロローピングについて講師から説明とデモを受け、各人で実際にやってみて基礎技術を確認した。

後半は雪崩捜索基本演習。講師とスタッフによる捜索デモの後、2班に分かれて1日程度埋没している等身大ダミーをビーコンとプローブで探し当て、雪の中から掘り出すところまでを行なった。

2日目は6時から座学で実際の雪崩動画を見ながら表層雪崩のメカニズムを学習し、回避判断に必要な知識を復習した。

その後、フィールドは雨模様のため体育館でツェルト梱包演習を4班に分かれて行ない、雪崩捜索総合演習に備えた。

10時からフィールドに出て富士特有の湿雪が降りしきる中、雪崩



体育館でのツェルト梱包演習



フィールドでの雪崩捜索演習

捜索の総合演習を実施した。講習生は4班に分かれ、雪崩発生、行方不明者の確認、警察への連絡、捜索役割手順の確認・指示、位置特定、掘り起こし、安置、梱包、搬送を行なった。ダミーを掘り出したところで、スタッフが身代わりとなり、安置、搬送は本物の人間で実施。

ビーコンとプローブによる位置特定までは数分であったが、安置までは生存目安の20分以上かかることもあり、迅速な救出の難しさを実感した。また、雪上で実際の人間を持ち上げ、梱包して搬送するに際しての注意点も学ぶことができた。

講習生の中には、本格的な雪上

訓練は初めてというメンバーもあり、習得した技術を各支部に持ち帰り復習をしたいとの感想が多く寄せられた。

今回の実技演習は、捜索と救出に重点を置いたものであったが、今後は雪崩回避についても実技を充実させた講習プランを作成したいと考えている。

昨年9月に剣岳で実施した全国安全登山普及講習会に続き、冬山における基本技術を本会の今後を担う青年層に伝授できたことは、大きな成果であると思う。この層が各支部のリーダーとなり、さらにその輪が広がることを期待したい。

また、2回の講習会を通して全国の青年層同士の交流が深まり、共同企画の山行も生まれようとしている。今冬は2件のスキー山行の計画が実行される見通しとなり、来夏には沢登りの企画も持ち上がっている。

最後になったが、国立登山研修所の渡邊所長、東専門職には多大なる御支援・ご協力をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げる次第である。

Culture

第3回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」に 高野秀行著『謎の独立国家ソマリランド』

神長幹雄



2013年2月
本の雑誌社刊
本四六判上製 512頁
定価2310円

「未知への探求」と「探検」への復権を期して創設された「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の第3回受賞作品に、高野秀行著『謎の独立国家ソマリランド』（本の雑誌社刊）が選ばれ、2月14日発表された。先にノミネートされていた5作品のなかから、1月22日の選考委員会による討議を経て決まったもの。

2010年7月、90歳で亡くなった本会の名誉会員・梅棹忠夫氏は、生前から「未知への探求」の重要性を語っており、亡くなる直前の5月、「山と探検文学賞」の創設の辞でも、次のような文章を残していた。

（本賞の創設がきっかけとなって、登山や探検活動がさかんになり、おおくの人びとの心に「未知への

探求」の火が燃えさかることをねがっております）

その梅棹氏の提唱、意向に十分添ったと思われる一作が、『謎の独立国家ソマリランド』だったといえよう。

この本は、20年にもわたって内戦が続くソマリアのなかにあって、独自に武装解除して平和に暮らししている独立国ソマリランドの実態を描いたノンフィクション。世界一危険といわれるエリアに2度にわたって長期取材を敢行し、誰も試みたことのない方法でその謎解きを試みた労作である。

今回の著作にはいくつかの幸運が重なったという。これまで日本ではソマリヤやソマリランドに関する情報がまったくなく、20年間も退避勧告が続いた危険地帯として、空白のまま残されていた。専門の日本人研究者、ジャーナリストもいない。さらに日本人には取り付きづらいソマリ人の気質も高野さんにはプラスに作用した。他

人にはあまり頓着しないのだ。だからほっとかれ「秘境」のままで存在し続けた。そこに平和で民主主義のソマリランドがあり、一方で海賊がいて、イスラム過激派の紛争地域があつて、まるで「おもちゃ箱をひっくり返したよう」だという。

そんなソマリヤやソマリランドに突撃取材、ぶっつけ本番で体当たりしていく。探検部出身の本領発揮というところだろう。

「でも、僕にはあまり探検しているという意識がないんです。それよりも現地の人にすぐ同化してしまう」

かつて探検というと、なんとなく大上段に構えているようで馴染めなかった。でも、憧れだけは強かった。そしてすぐ現地の人々の気持ちに同化でき、外から来たという思いは薄れ、住んでいる人と同じ目



「未知」が大好きだという高野さん

線がほとんど同じになってしまふ。探検しているという意識が薄くなるというのだ。

こうして本書は、日本人にはまったく馴染みのない地域でありテーマであつても、512頁という重たい大冊であつても、読者を惹き付け重版を繰り返してきた。

「僕は物語作家だと思っただけです。おもしろい話を紡いで、読者にどう読んでもらうかが重要です」

高野さんのモットーは「誰も行かない所へ行き、誰もやらないことをやり、誰も知らないものを探す。それをおもしろおかしく書く」ということだ。これまでに刊行された二十数冊の著作がそれを物語っている。

受賞の第一報に、高野さんは自分には縁がない賞だと思っていたという。本格的な登山はやっていないし、探検しているという意識もない、さらに文学に造詣が深いわけでもない謙遜するが、まさに梅棹氏が提唱する「未知への探求」に最もふさわしい受賞作だといえないだろうか。「とにかく僕は「未知」が大好きなんです」と顔をほころばす。

Report

富士山におけるスラッシュ(融雪)雪崩と、スラッシュ現象による大量山岳遭難事故

—富士山に特徴的な雪氷現象と遭難の特異性— 全国支部懇談会静岡大会講演会より

安間 荘

昨年10月20日に静岡支部主催により、第29回全国支部懇談会静岡大会が開催された(詳細は本紙2014年1月号既報)。その際に、安間荘元支部長による下記講演があった。講演では、1972年3月に富士山で、24人という登山史上例のない遭難事故が起きたこと、また、その原因がスラッシュ雪崩と呼ばれるものであることを、映像を駆使して説明された。

今回はその講演内容についての概略を、講演者である安間会員に書いてもらった。

*

富士山は、太平洋側の暖温帯に立地するが上部は高山帯環境にあり、様々なタイプの雪崩が様々な場所で、様々な時期に発生し、思わぬ大規模災害や大量山岳遭難事故が起きている。

富士山麓で、古来「雪代」と呼ば

れる融雪期の洪水土砂災害は極めて特異な雪氷象象災害で、世界的にも「Yukishiro Jihar」として認められつつある。富士山における山岳遭難事故のいくつかは、この雪代現象と深く関係しており、1972年3月20日の宝永山東斜面における大量遭難死亡事故は、この典型である。

この遭難事故は、富士山東斜面の宝永山付近で雪上登降訓練キャンプ中に、天候急変に遭遇して豪雨の中を撤退下山の途中、寒さと疲労および雪崩で24人が命を失ったものである。戦前戦後を通じて日本最大の山岳遭難事故でありながら、今日に至るまでその実態は曖昧模糊としたままであった。

遭難した静岡県内の2パーティ計21人は、下山開始後、数時間以内に次々に倒れだした。生還した3人は、下山時の先頭または2番

目にいた。積雪深は1メートル程度あったが、ラッセルの深さは膝または膝よりやや上までであったという。先頭ラッセル者の靴底面は積雪層上半の不飽和層にあり、雪の内層摩擦による支持力を利用できた。しかし後続者は不飽和層を踏み抜き、下半の水で飽和された積雪層(粒子間接触が減少し支持力が低下した)、さらには積雪層下の凍結した地表面まで潜り込んでいたのである。

ラッセル跡には、周辺の雪粒子



太郎坊のスラッシュ雪崩

間水が流れ込み、冷水で満たされた濠となる。後続者は下半身がほぼ0度Cの氷水に漬かり、1時間もしない内に低体温症で意識を失い仮死に至ったのである。

72年3月のこの遭難の原因は予期しない荒天に遭遇したことにあるが、積雪のスラッシュ化に伴う雪の力学特性の変化とスラッシュ雪崩についての知識を、学会、山岳界、マスコミ、世間一般も持っていた。

遭難後40年経った今日、少しずつ遭難の疑念が晴れてきた。



一力英夫君を偲ぶ

田邊 壽

一力英夫君が逝った。享年79歳だった。

一力君は仙台の名門の出身で、河北新報の一力社長の次男。慶應義塾大学山岳部で、私と仲間だった。高校時代より山登りに励み、そのとき同行した友人を山で失う悲しみにも出会ったが、大学でも山岳部に入り山登りを続けた。

日本山岳会と、慶應義塾大学山



一力英夫 (いちりき・ひでお) 会員No6648

1934年 仙台に生まれる。父親が登山界・慶應義塾大学の大家で仙台出身の横有恒氏、早川種三氏と親交があり、その影響で中学時代より山登りに親しんだ。

1952年 慶大入学と同時に山岳部に入り学士入学により6年間在学。この間、厳冬期の前穂高北尾根の極地法登山、針ノ木岳から前穂高縦走、北鎌尾根より槍ヶ岳、遠見尾根より鹿島槍、笠ヶ岳から奥穂岳への極地法登山を経験。

1958年 朝日新聞入社。北海道支社長、取締役事業開発本部長、名古屋本社代表を歴任。この間、北海道では冬の「札幌・50峰」に登る。

1996年 関連会社・朝日旅行社社長に就任

2000年 同社退任。この間ニューギニアのウィルヘルム山、モンゴルのフイティン山、中国の四姑娘と梅里雪山、カムチャツカのクリチェフスカヤ峰などに登る。その後山岳会理事を務めたが病を得て、2013年12月30日病没。

岳部「登高会」の仙台との結びつきは古く、深い。横有恒さんは仙台市の名誉市民であり、早川種三さんも古いメンバーであり、お父さんは仙台市長を務めた方だった。こういう繋がりから、一力君が慶應義塾大学山岳部や日本山岳会に進んだことも当然の途であり、私との関係もここから始まった。

彼は私と同様に学士入学し、大学に6年在籍した。オーガナイザーとしての能力にも秀れ、多くの優秀な部員を育てた。在籍最後の

年には、笠ヶ岳から奥穂高岳に至る極地法登山のリーダーも務めた。秀れた資質の一力君の前には、当時の多くのアルピニストと同様、ヒマラヤへの望みがあった。

1960年春、登高会には大学創立100年記念としてヒマラヤの未踏峰ヒマルチュリ(7864m)への計画があり、当然、一力君も挑むポジションにあった。しかし一力君は父親の関係から、朝日新聞社に就職した。

一方、大学のヒマラヤ計画は毎日新聞社の後援が決まっており、参加は難しかった。ヒマルチュリ登山準備会に参加しながらも、朝日新聞社員として地方赴任のため途中退席する一力君の心情は察するに余りあった。

58年、朝日新聞社に入社した一力君は北海道支社長、名古屋本社代表役員と重責を務め、96年、朝日旅行社の社長となった。

慶應義塾大学山岳部報『登高行』5号(24年刊)に、オスカア・エリッヒ・マイエルの『行爲と夢想』より「二人者」(Die Beiden)という一文がある。山での死を介して山登りに対する生き方を考えた一文で、登山に関する死生観を述べた

ものだ。山で友人を失いながら慶應の山岳部に進んだ彼が、山にも仕事にも未来を持って、このヒマルチュリの件で「Die Beiden」の一人としての自分の途を、はっきりしたのではないだろうか。これは一力君と話したわけではなく、その後の彼の生き方から私が思ったことだ。

一力君は朝日旅行社の社長となつて、他の大学山岳部のOBを誘い海外の山々を登った。ニューギニアのウィルヘルム山、モンゴル最高峰のフイティン山、中国の四姑娘と梅里雪山、カムチャツカのクリチェフスカヤ峰、キルギストパミールの山々……と、本当に多彩であった。

晩年、一力君は日本山岳会の仕事にも従事したが、病床につき一生を終えた。豊富な冬山経験と山の友人を多く持っていた一力君は、まだまだ自分の山登りにも山岳界のためにも、やりたいこと、できなかったことがあったに違いないと思うと本当に残念であり、その死は悲しみに耐えない。

東 西 北 南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

20もの研究発表、「防虫」と「身体と心」の講演が好評だった研究大会

日本山岳化学会

日本山岳化学会の第11回研究大会(野口いづみ実行委員長)が、日本山岳会医療委員会の後援を受け、2013年11月16日〜17日に、東京慈恵会医科大学高木会館2号館南講堂で開催された。参加者数は136人だった。

初日は20題の一般口演と招請講演が行なわれた。砂田定夫氏は「小島鳥水と岡野金次郎の交友」について、山森欣一氏は「大島亮吉と今西錦司の文通」について、佐々木誉実氏は「大正4年に槍ヶ岳に登頂した内藤千代子」について、それぞれ報告され、聴きごたえがあった。松山峰子氏の中国の「終南山」は、遁世思想の紹介で、耳新しかった。横山秀司氏の口演では、世界遺

産・富士山へICOMOSから多くの要求がされていることを知って驚いた。中村純二氏は原発冷却水の放出が地球温暖化の大きな原因とする説を示され、緊喫の検証が必要と思われた。酒井國光氏の筑波山雨引山薬法寺のマンダラ鬼神祭の口演は、茨城の山の主ならでの発表で、写真が美しかった。総じて文系科的なテーマが多く、今後、理系・科学的な口演が増えてほしいように感じた。

招請講演では秦和寿氏により、「山地でのマダニの被害を防ぐ」が行なわれた。防虫具を装着されている実演、マダニやハチの標本箱の回覧、ハチやヘビなどの話まで、聴衆を楽しませた。秦氏の講演の後、一般口演で野口が虫刺されについて実例を紹介し、総論と各論になった。懇親会では森山安次氏寄贈の山名のついた日本酒が人気を博した。相変わらず年齢を超越した



秦和寿氏の「マダニ」講演

会員の健啖家ぶりもうかがわれた。2日目のシンポジウムは山岳医学医療分科会が主管し、「山における体と心」というテーマで、5講演が行なわれた。座長は日本山岳会医療委員会委員長(慈恵医科大学山岳部OB会会長)浜口欣一氏が担当した。まず、前半は齋藤三郎氏が、槍ヶ岳でのアンケートから登山者の山を想う心についてまとめた結果を発表し、続いて自らもトレイルランナーである野田寿恵氏がトレイルランニングの現状と問題点について講演した。20年近く、年間数回だったレース数がここ2、3年で150回を超えるようになったという。

油井直子氏は登山時の疲労対策に使われるサポータイトについて、整形外科医の観点で基礎から使用効果までわかりやすく解説した。後半は野口が登山時のケガの実例を提示しながら対処法について紹介した。最後に大野秀樹氏が、

テーマにふさわしく、「山は身も心も豊かにする」と題した講演をして、聴衆を沸かせた。

最後の討論では自然保護の観点からトレイルランを検証する発言があった。登山とトレイルランとの共生については今後、模索されるべき課題だろう。なお、講演者5名中3名が女性で、新鮮な感じを与えた。

2014年は文献分科会(中岡久代表)主管による第12回大会が11月29〜30日に、同会場で行なわれる予定。ぜひご参加下さい。

(医療委員会 野口いづみ)

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

図書委員会

年次晩餐会会場で 図書交換会を開催

昨年度の図書交換会が大変好評だったこともあって、今年度も12月7日の年次晩餐会の会場で図書交換会を開催した。会員から出品された山岳書はこれまでの最高の700冊を超え、事前の準備に思わぬ手間がかかった。それに加え



広い会場に700冊の本が並んだ

て、あまりの冊数の多さに当日の売れ残りを心配したが、最終的には約40冊を残してすべて頒布することができた。

参加者(抽選で本を得た人)は約100名で、会場に参加できない事前申込者と、当日の会場での参加者の数がほぼ半数ずつだったのは奇遇。そのほかにも、申込みをしながら抽選に外れた人も多かったことは申し訳なかったが、たくさんの方の会員に山岳書に興味を持ってもらえたことは何よりだった。

広い会場に700冊の山の本がずらりと並ぶ様は圧巻だったが、100年にわたって読み継がれてきた、そのほんの一部分であることを考えると、山の本の世界の多様性と奥深さを実感させられた。

さて、人気本を紹介する。『高山深谷 第十号』(日本山岳会・編)に15名の申込み、『山旅の素描』(茨木猪之吉)に14名の申込み、

『もしかある日』(J・ランギュパン)と『黒部溪谷』(岩橋崇至)に13名の申込みがあった。そして『原野から見た山』(坂本直行)、『アルプ0号 特集串田孫一』(山と溪谷社・編)、『岳麓点描』(井伏鱒二)が12名で続いた。

入札本については、『一登山家の思い出』(ジャヴェル)に7500円、『山の風流使者』(小島烏水)に8000円、『岳書縦走(特装本)』(雁部貞夫)1万1500円、『山の憶ひ出(上・下)』(木暮理太郎)7800円、そして『年報独標1』(独標登高会)に50000円の値がついた。

4時間の長丁場の途中で、静岡支部会員からミカン一箱の差入れがあり、参加者全員が小休止して頬張る一幕もあった。また、竹内洋岳さんの講演を聞きに来て足を延ばしてくれた若い会員の姿も何人か見受けられ、その中には制服姿の女子高校生会員の姿も。さすがに700冊もの本の多さに、委員一同、音を上げそうになっていたが、その苦勞も吹き飛び、若い人たちにもさらに山の本を届けたと思う一瞬だった。

(三好まさ子)

集会委員会

2013年年次晩餐会 記念山行に参加して

12月18日

本部開催の山行や集会は久々に参加させていただきました。今回は湘南の海水浴リゾート地大磯の高麗山(168m)とのこと。あれあれこんな山もあったのだと思いつつ、年次晩餐会の記念山行に参加してみることができました。

*

品川駅の改札を出ると高橋さんがJACの旗を持って待っていて道順を指示して頂き、要所々々でも指示してもらい、迷うことなくバスの集合場所に到着できた。

受付を済ませて2号車に乗り込むことになる。会長をはじめ参加者全員を乗せたバスはほどなく首都高に入り、東京タワーや六本木ヒルズ等の東京摩天楼の間をすり抜け、首都高3号線・東名高速と乗継ぎ、厚木からは小田原厚木道路に乗り換えて、目的地の大磯の登山口である、高来^{たかく}神社に着いた。高句麗と関連がある高麗権現を祭る由緒正しい神社らしく、立派な社殿で白山権現、毘沙門天と



出発前に高来神社で記念撮影

合わせて三社あるようだ。高来神社の周辺に住んでいた高句麗の人々は、埼玉の高麗神社のある地域に移り住んだとの説明看板があり、何かしらの縁を感じた。

ここで全員が準備体操と記念撮影をして、行動を開始する。女坂を経て最後の石段を上るとすぐに山頂に着き、大きな広場に小さな奥社が祭つてあった。ここからは尾根歩きであるが、樹林帯なので視界はない。公園のような整備された道を、紅葉に見降ろされて八俣山、浅間山(二等三角点181・3)を訪ねながら、簡単に昼食地の千畳敷に着く。ここは眺めが良く、大磯の街並みや海岸を見降ろすことができ、その先には遠く伊

豆の大島が浮かんでいる。また、山手の方面は大山からの丹沢の山並みが指呼の間で見渡すことができ

た。残念ながら、富士山は高曇りのせいで見つけることはできなかったが、展望台に上り風景を見渡しながらかつてみる。山頂にはレストランや売店もあり、般若湯も入手可能である。まさに里山ならではのパラダイスであるが、一般の行楽客も多くいるので賑やかである。山深い趣向をお求めの方には、お勧めできないかもしれない。

またここには、日本山岳会の創設にご尽力頂いた岡野金次郎翁の顕彰碑もあり、同翁に詳しい砂田会員より、詳しい立ちや日本山岳会設立のいきさつ等の説明を受けることができた。

下山も高田公園を経てほどなく街中に降りつくことができたが、大磯漁港までの間に、今年の大河ドラマの主人公・八重の夫である新島譲の終焉の地である、百足屋旅館の跡地があり、立派な碑が建っていた。ドラマの中のセリフである「グッドバイ、また会わん」という遺言が説明看板に書いてあり、ちょうど最後の場面が先週の放送だっ

たので、非常に生々しく想像することができた。

大磯漁港にはすでに2台のバスが待っていてくれて、ここでお別れの皆様と挨拶をして、往路と同じ経路で途中、新装開店で混み合う海老名SAに立ち寄り、品川には4時ごろに着くことができた。

*

一日海を見ながらの里山歩き、何とか雨も降らずに気温が低いおかげで汗もかくことがなく、のんびり山行を楽しむことができて、良い思い出となりました。集会委員の皆様、このような企画を立てられ、準備をして頂きまして、ありがとうございました。

(埼玉支部 正田範満)

アルパインフォトビデオクラブ 八ヶ岳高原で撮影上達のための勉強会と撮影会

10月20日(日)～21日(月)

山岳会でもお馴染みの八ヶ岳高原「ロッジ山旅」をベースにし、参加者18名(内女性6名)で2013年撮影会が行なわれた。あいにくの天候なので、懇親会までの間に川嶋代表にスライドの上映を願

「四季の鳥海山」の映像をメインに撮影上達の勉強会を行なった。

懇親会は川嶋代表の挨拶、松本会員の乾杯の音頭が始まり、ロジの名物料理、飲み切れないほどの差し入れのアルコールで大いに盛り上がった。新入会員の道さんに最後の締めを願ってお開きにした。二次会はサロニールで今は懐かしいレトロなレコードで、軽音楽を聴きながら写真談義に花が咲いた。数年前まではデジタルカメラの将来がどうなるかの話題が中心だったが、今ではほとんどの会員が使っており、撮影実績での意



ロッジ山旅をベースに18名が集まった

見交換が主になった。
カメラマンの朝は早い。未明に空を見ると満天の星空に月が懸かり絶好の撮影日和である。

5時間前に川俣川に架かる黄色の「八ヶ岳高原大橋」で撮影に入る。笠をかぶった富士山が幻想的に浮かび、はやる心を抑えながらシャッターを切った。早朝の撮影が終わり朝食を済ませ、天女の舞の伝説が残る天女山で撮影をしてから解散式を行ない、そのあと各自が目的の撮影地に向かった。

11月の例会は撮影会での作品の上映会を行なう。同じ被写体でも撮る作者の視点が違うので参考に、今後の活動につなぎたいと思った。
(山本武志)

支部



だより

越後支部

節田副会長を迎え、支部年次晩餐会を開催

12月14日(土)に平成25年度越後支部年次晩餐会が、新潟市の東映ホテルで盛大に開催された。毎年12月第1土曜日の本部年次晩餐会に引き続き、第2土曜日が越後支部恒例の支部晩餐会開催日であり、84名の支部会員の参加があった。

今年度は、来賓として節田重節副会長にご出席いただいた。そして、山田智子会員が旭日単光章受賞、遠山實会員が藍綬褒章受賞、田邊信行会員が環境大臣賞受賞の栄誉に輝き、越後支部としても大変名誉ある慶事の重なる記念すべきお祝いの晩餐会となった。

14時より桐生恒治事務局長の司会進行で開式宣言、この1年で鬼籍に入られた支部会員4名(室賀輝男氏、小林智明氏、北村猛氏、梁

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

取静五氏に黙祷を捧げた。次に12月7日の本部年次晩餐会で永年会員表彰を受けた越後支部会員5名(筑木力氏、本間宏之氏、南雲克良氏、太田邦介氏、小野健氏)を紹介し、橋本正巳支部長の開会挨拶、阿部信一新潟県山岳協会会長に祝辞をいただいた。

第一部記念講演は、節田副会長から「植村直己——その人と冒険」と題して講演を行なった。

節田副会長は本県佐渡市の出身であり、越後支部とは非常に深い関係がある。明治大学山岳部で故植村直己さんの1年後輩であり、このテーマでの講演をお願いした。植村さんの生い立ちや山岳部時代からの活動と思い出話、世界に飛び出している数々の登山と冒険を計画実行したことを、スクリーンに大きく写した写真と略年譜の資料に従い面白く話していただいた。数々の冒険や困難な登山を成し遂

げた植村さんは、「実は目立たなく優しい臆病な先輩であった。」ということが、非常に印象的なお話であった。

第二部の晩餐会開宴前に、今年度の叙勲・褒章・大臣表彰を受けた山田智子氏、遠山實氏、田邊信行氏の3氏が壇上に並び紹介され、事務局より経歴紹介を行なった。参加者全員で大きな拍手をもって3氏の慶事を祝福した。

山崎幸和前支部長に乾杯の音頭を取っていただいたが、叙勲・褒章・表彰者のお祝いと共に平田大六支部会員が関川村村長に当選されたこと、節田副会長は新潟県出身者として高頭仁兵衛翁に次ぎ、日本山岳会の要職に就かれたことを付け加えて祝宴に入った。

その後懇親・懇談が続くなか、今年度新しく越後支部の仲間となった会員紹介を行なった。編入会員1名と新入会員10名であり、近年にない多くの仲間を得ることができた。越後支部の平均年齢高齢化と支部会員減少は、多分本部以上の速さで進んでいると思われる。しかし、新会員勧誘運動を強力に推進したこと、支部会員の精力的な努力により会員減少に歯止め



越後支部晩餐会記念撮影

がかかっってきたと思われる1年であった。
 また今回の役員会で2つの支部同好会設立が承認され、新たに活動を始めることになったことが報告された。スノートレッキング同好会(設立発起人代表田邊信行氏)とフォト・スケッチ同好会(設立発起人代表本間一人氏)である。この同好会が、これから支部を活性化するための起爆剤として活動することを期待したい。

越後支部年次晩餐会は、多くの支部会員が一堂に会し、山談義に花を咲かせる越後岳人のサロンの

場である。節田副会長とも直接会話を機会に恵まれて、大いなる盛り上がりを見せた。中締めを遠藤家之進正和副支部長の万歳三唱で、成功裏に終了することができた。

節田副会長には遠路ご足労賜り、越後支部会員と親しく接していただきました。この紙面を借りてお礼申し上げます。(桐生恒治)

四国支部

剣山国定公園指定50年。様々な記念行事に協力予定

四国にある山の2つの国定公園のうち、剣山や三嶺を含む「剣山国定公園」が今年で指定50周年を迎える。四国支部は様々な記念行事に協力する予定で、2月25日には同公園の監視活動をしているNPO法人剣山クラブ主催の「岩崎元郎さんの健康登山講座 in 徳島」を支援。4月の「小島鳥水祭」の翌日には希望者を三嶺に案内。5月の広島・山陰支部との交流会と9月の「子ども登山学校」の際、剣山や三嶺に登って啓発する。ほかにも国定公園内の清掃や登山道整備などを検討している。(尾野益大)

図書紹介

根深誠・著

世界自然遺産 白神山地 ブナの息吹、森の記憶

2013年11月発行
七つ森書館刊 変形208頁
四六判 定価 1680円



2013年11月発行
七つ森書館刊 変形208頁
四六判 定価 1680円

世界自然遺産 白神山地 ブナの息吹、森の記憶

「幾千年の遙かな昔から、ブナの森の緑の樹冠は、ざわざわと葉ずれの音を風に響かせていたはずだった。その響きは流れる川のせせらぎのようであり潮騒にも似ている。」という冒頭から文章を味わいながらゆつくりと読み進んでいくと、自分なりの白神の森の様々な情景が浮かんでくる。著者は高校1年生のときに仲間と暗門ノ滝に出かけたり、白神岳に初めて登ってから、以来、半世紀がたつという。大学の山岳部OBとしてヒマラヤやチベットに通いつめると同時に故郷の自然を愛し、白神山地

を四季おりおりに歩きつくしている。テントを張って過ごし、時にはイワナ釣りをし、そこでそのときどきに様々な動植物を目にする。めまぐるしく変化する気象状況、自然の様子、風景がまるで映像を映し出すかのように描かれている。第二章では、昔から営まれてきた人々の暮らしをしのばせる民話や、今は亡きマタギの鈴木忠勝さんから伝え聞いたクマ撃ちや猫の話などが載せられている。
 この本は、その書名が示すブナの息づかいや、森の記憶と呼べるような文章を今までに発表されたものの中から選び集めたものである。世界自然遺産に選ばれた経緯を説明したり、また、白神山地の沢や藪歩きをする際の案内書の役割を果たすことは目的とされていない。
 しかし、赤石川や追良瀬川のそれぞれので美しさや、魅力が描かれ

ていて、特に第三章では文章の中で、白神山地に何度も分け入った人のみが知る沢名や地名とともにかなり具体的な様子が記述されている。

第三章のあとに、遊歴文人菅江真澄の紀行文の紹介もされている。寛政8(1796)年旧暦の11月に、噂に聞く名瀑をぜひ見物したいとの思いから深浦から7日かけて暗門ノ滝を探訪し、その紀行文を世に出した。菅江真澄がたどった杣道は今も所々残っているが、降雪のある時期にどのようなだったのか著者は興味深く推し測っている。

著者とは数年前、白神山地に同行させていただく機会があり、改めてこの本を読むと、そのときの様子と合わせて、本当に白神山地の自然を遠い昔からのつながりを含めてまるごと愛し、心から楽しんでいることが伝わってくる。

(小松崎幸代子)

登山案内 統一等三角点全国ガイド

一等三角点研究会・著



発行 2013年12月
出版 2013年11月
ナカニシヤ出版
A5判 190頁
定価 1800円

この本は『登山案内 一等三角点全国ガイド』(2011年11月刊)の続編である。前著が標高5000以上の546点を、本書は5000以下429点を紹介している。編著者は前と同じ、出版社も前著と同一であり、個々の三角点のデータを記載し、標石を写真で示す体裁も同じである。

日本政府による国土測量製図事業は初期の内務省と陸軍が別個に始めた方式を陸地測量部所管に改め、1890年から全国的な5万分の1地形図作成を開始した。この三角測量の基準点が、平均約45km間隔で設置された一等三角点である。この三角点網の中に二等以下の三角点が作られたのである。その総数は、一等976、二等5063、三等3万2110、四等同7万769、合計10万8918であり、現在は国土地理院が管理することは誰でも知っている。

北海道宗谷岬の西方、礼文島に道内第2の高緯度に置かれた一等三角点がある。以下に本書の叙述

を引用する。

「点名：礼文岳、山名：礼文岳、標高489・96m、基準点コード(略)、選点：明治32年、地上埋設1/5万図名：礼文島北部、北緯(略)、東経(略)、所在地：礼文郡礼文町大字香深村141、三角点道：鴛泊港からフェリーで礼文島香深港に渡り路線バスの内路バス停で下車。バス停前の登山口からチシマザサの尾根を登る。稜線のハイマツを辿り山頂に出る。洋上の利尻島に利尻富士を望む。」

付載の写真から四方数十kmの範囲に堂々その存在感を主張する三角点であることがわかる。標高は500mに足りないにしても山頂にあつて登山者を静かに迎え、疲れを癒してくれる三角点はここに限らず、方々にあることは言うまでもない。

千葉県には500mを超える山がないのだが、県内にある一等三角点26基を見ると、鋸山のように山頂に据えられたものがあるのはもちろんだが、小学校構内、区民会館前、畑の中、道路の脇など平地に埋設されたものも珍しくないことを教えられる。また、各地方の自衛隊基地の中にあるものが10

基以上あり、礼文島のような有人島は言うまでもなく、定期就航船を欠く17の無人島にも一等三角点がある。編者たちは日本最東端の南鳥島と最南端の沖ノ鳥島、鹿児島県トカラ列島内の臥蛇島と横当島、この4つの三角点を訪れて確認することができなかつたと断っているが、この例外を除くすべての一等三角点を訪れ、現況を示す写真を載せているのは立派である。貴重な労作であり、各所に散りばめられたコラムも楽しく読める一冊である。

(酒井敏明)

静岡大学山岳部・紫岳会編

『紫岳』第十三号



2013年10月発行
静岡大学山岳部・紫岳会刊
B5判 515頁

静岡大学山岳部・紫岳会の会報『紫岳』第13号が、10年ぶりに発行された。創部80周年の記念の年でもある。母体である旧制静岡高校山岳部の創設は昭和8年、当時はバックグラウンドである南アルプスなど、まだ開拓期にあり、近代

アルピニズムを学校山岳部がリードしている時代であった。

現今では登山の方法も、会員の山に対する考え方も、また学校山岳部の活動内容も格段の変革を来している。山本良三会長も本号の執筆のなかで、現今の山登りや山岳部の実態に触れ、その方向性についても論じておられるが興味あるところである。そのような背景から部会報の編集内容に変化が見れるのも自然であろう。

まず、本号の紙面構成を見ると、従来の編集とは異なるふたつの大きな特色が見られる。ひとつは部のオフィシャルな活動記録を思いきって簡略化していることであり、もうひとつは多様な読み物となるよう大幅に紙面の転換を図っていることである。学校山岳部の部会報といえば、とかく活動記録中心に編纂するのが通例であるが、本号ではそのような型から脱皮し、より面白い、読まれる会報へ移行しようとする、大きなうねりが感じとれる。

本号では会の活動記録は、別に連続性のある「紫岳ニュース」の発行もあることから、年度別に、日誌風の記述で簡潔にまとめている。

また、海外関係でも天山山系への5次にわたる登山・偵察行、北米大陸へのロッククライミング紀行など、報告に無駄がない。

一方、会員の紀行、報告、研究、随想、思い出などの寄稿では、多彩なテーマで山と人生について綴っており、読み応えのある内容豊かなものが多い。また、執筆者に卒業年次を異にする多くのOBを動員したことは、本号をいっそう奥行きのあるものに仕立てている。過去の記録を補完する効果も出ているように思われる。南アルプスの深南部を17年間、車を使って日帰りで登ったという報告は、山の楽しみ方のユニークな面もあるが、紫岳会の会員ならではの報告で、記録としても、また読み物としても興味を覚える。森の香りが伝わってくるようである。

(松家晋)

(追記)

今般、「紫岳会」より、創刊号を含む戦前の『紫岳』各号が本会図書室へ寄贈された。

図書受入報告(2014年1月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
一等三角点研究会(編著)	登山案内 一等三角点全国ガイド	259p / 21cm	ナカニシヤ出版	2012	出版社寄贈
一等三角点研究会(編著)	登山案内(続) 一等三角点全国ガイド	191p / 21cm	ナカニシヤ出版	2013	出版社寄贈
岡田喜秋	定本 日本の秘境(ヤマウイ文庫)	382p / 15cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
地図情報センター(編)	富士山と地図:「地図情報」Vol.33 No.3(通巻 No.127)	43p / 30cm	地図情報センター	2013	発行者寄贈
平山善吉	我が山と南極の生涯	364p / 22cm	茗溪堂	2014	著者寄贈
遠山實	山燦然:山に生かされて	81p / 26cm	遠山實(私家版)	2013	著者寄贈
国際山岳年プラス10(委)	みんなで山を考えよう:国際山岳年プラス10シンポジウム2012年報告書	150p / 30cm	国際山岳年プラス10(委)	2013	発行者寄贈
香川浩士(編)	ペルーアンデス登山報告書 2013	64p / 26cm	富山県山岳連盟	2013	発行者寄贈
永山義春(編)	アコンカグア登山報告書 2009	60p / 26cm	富山県山岳連盟	2009	発行者寄贈
塔の会(編)	谷同句集 塔 第9集	460p / 20cm	梅里書房	2013	編者寄贈
石井達男(編)	合川岳堅炭岩に眠る友へ	82p / 26cm	東京出版販売	1960	今澤聖氏寄贈
愛媛大学山岳会(編)	愛媛の山と溪谷(愛媛文化双書 No.16)	279p / 19cm	愛媛文化双書刊行会	1991	今澤聖氏寄贈
澤田昭一 他(編)	山脈追慕	109p / 26cm	澤田昭一他(私家版)	1938	今澤聖氏寄贈
Heichel, Wolfgang	Chronik der Erschliessung des Nanga Parbat	415p / 30cm	Wolfgang Heichel	2013	中村保氏寄贈



会務報告

平成25年度第9回(1月度)理事会
議事録

日時：平成26年1月15日(水)19時～
21時

場所：日本山岳会集會室

【出席者】森会長、節田・黒川・古

野各副会長、高原・吉川・

佐藤・各常務理事、大槻・

落合・勝山・川瀬・直江・

野口・山賀・山田各理事、浜

崎・吉永各監事

【オブザーバー】柏編集人

議事に先立ち森会長より「新執行部で7ヶ月経過した。会員増強については、若い会員が増えつつある。なお一層強化すると同時に、110周年記念事業を移行に移していくときである。皆さんの協力をよろしく」との挨拶があった。

【審議事項】

1・(株)エイジスの資料管理システム使用中止について(勝山)

資料映像委員会で使用している資料管理用システムは、経年に伴いシステムの改善等が難しいことから、同委員会からの申請により使用を中止する。(承認)

2・入会希望者について(高原)

11人の入会希望者があった。(承認)

【協議事項】

1・会計・財務などの改善提案について(吉川)

稟議書の導入、会費の銀行口座引き落とし制度の導入、準会員(仮称)制度の導入、年度途中入会者の年会費の割引制度の導入などについて協議し、関係委員会等において検討することとした。

2・JAC主催山行における山行連絡および事故連絡フローについて(川瀬)

遭難対策委員会において作成した別添フロー案について協議を行

なった。

【報告事項】

1・各PT、WGについて

(1)110周年記念事業準備委員会(黒川)

海外登山を軸に検討を進めており、「110周年記念事業における海外遠征隊及び募集型海外山行についての留意点」、プータンの登山に関連し有識者を招いて懇話会を開催すること等の報告があった。

(2)会員増強・財政基盤検討PT

(黒川)

会費の銀行口座引き落とし制度の導入、準会員(仮称)制度の導入、年度途中入会者の年会費の割引き制度の導入などについて検討を開始したとの報告があった。

(3)支部活性化PT(森)

支部から申請のあった事業補助、支部リーダー育成のための講習会等について検討しているとの報告があった。

(4)ルーム検討WG(高原)

ルーム検討の状況について、またメンバーに河西瑛一郎(4502)と村井龍一(5091)の2会

員を追加するとの報告があった。

(5)家族登山普及WG(吉川)

HPに掲載予定の「親子で楽しむ山登り」について、概要の説明があった。

2・公益社団法人国土緑化推進機構他3件の寄付金・助成金受入にかかわる事前申請報告および7件の寄付金受入があった。(吉川)

3・2013年度期中往査報告(平成25年12月13日)について(吉永)

職務権限規程、会員管理システム、販売用物品の収支管理・在庫管理、ユースクラブ、親子登山等、幅広い観点から、監査状況についての報告があった。(吉永)

4・今後の支部長、支部事務局会議の開催について、6月の支部会議は行なわず、9月に事務局会議を開催し、支部長にも出席してもらう方向で検討しているとの報告があった。(高原)

5・海外委員会から「2014年度富士山国際交流登山」実施計画の概要について報告があった。(川瀬)

6・2014年度晩餐会会場について京王プラザホテル(新宿)で検討しているとの報告があった。(高原)

7・上高地山岳研究所内野管理人から退職願が提出されたことにつ

いて報告があった。(大槻)
 8・越後支部から第57回高頭祭への本部からの参加・講演について依頼があり、承諾するとの報告があった。(高原)

9・国際山岳年プラス10シンポジウム2012の報告書が送付されたので、配布することについて報告があった。(高原)

10・「富士山における適正利用推進協議会」から、冬山遭難防止に関する要望書が送付されたことについて報告があった。(高原)

11・会報「山」1月号について(栢)1月号の概要説明があった。その他、編集協力の奈良千佐子会員(12078)が退任し、後任に原邦三会員(9080)があたる旨の報告があった。

【今後の予定】

- 1・支部事務局会議 1月25日(土) 26日(日)
- 2・平成25年度事業・会計報告書提出依頼(支部・委員会等) 1月24日
- 3・同上提出期限 事業報告2月28日、会計報告3月31日(出来る限り早い提出)
- 4・ブータンの登山に関する第1

回懇話会2月15日(土)14時～18時104号室
 5・第8回森づくり連絡協議会の開催(広島) 3月21日～22日予定
 6・NPO富士山測候所を活用する会第7回成果報告会1月26日(日)

平成26年度第10回(2月度)理事会
 案内
 日時 平成26年2月12日(水)19時より

場所 日本山岳会集會室

- 議題 1・平成26年度事業計画予算案について
- 2・海外登山助成金審査委員会からの提案について
- 3・その他

ルーム日誌 1月

- 6日 総務委員会 高尾の森づくりの会
- 7日 図書委員会 スケッチクラブ
- 8日 常務理事会 集會委員会 YOUTH CLUB
- 9日 フォトビデオクラブ 遭難対策委員会
- 10日 家族登山普及WG 九五会
- 14日 山岳研究所運営委員会 ス

15日 キークラブ スケッチクラブ
 理事会 つくも会

17日 山岳地理クラブ
 18日 フォトビデオクラブ 山の自然学研究会

20日 フォトビデオクラブ 総務委員会 資料映像委員会

21日 支部活性化PT スキークラブ

22日 東京多摩支部 自然保護委員会 麗山会 家族登山普及WG

23日 二火会 公益法人運営委員会 総務委員会 フォトビデオクラブ 学生部 山遊会 みちのり山の会

24日 総務委員会 財務委員会

25日 支部事務局会議

27日 YOUTH CLUB

28日 緑爽会 デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 海外委員会

29日 三水会 110周年記念事業PT

30日 YOUTH CLUB 1月来室者 425名

会員異動(1月分)

物故 藤井 信(4468) 14・1・11

退会
 小田哲夫(6398) 13・12・30
 鍵和田洋一(6592) 13・12・31
 一力英夫(6648) 13・12・30
 後藤守男(7617) 14・1・3
 井野元繁(9674) 14・1・28
 明井克子(12822) 13・12・31

村山延久(9354) 青森
 福島 勉(10591) 北海道

二宮善蔵(11310)
 米かづ江(11471)

江上清治(11844) 福岡
 工藤泰幸(12054)

川崎洋一(14671) 広島



◆第2回「小島烏水祭」のご案内
(予定) 四国支部

期日 2014年4月13日(日)

場所 峰山公園・小島烏水顕彰碑

前(香川県高松市、JR高松

駅から車で約20分)

記念式典 9時〓受付、

9時30分〓開式、開式挨拶〓小

島烏水祭趣旨説明〓主催者

挨拶(森 武昭〓日本山岳会24

代会長)〓来賓挨拶(鎌田守

恭〓香川県議員、大西秀

人〓高松市長、中村順一〓高

松山市議員、尾上昇〓日

本山岳会23代会長、神崎忠

男〓日本山岳協会会長)

10時〓記念講演「山小屋から見

た日本のエネルギー問題」

(講師は森 武昭会長)

11時〓碑前祭(神事、献花、吟

詠、コーラスなど)

12時10分〓閉式挨拶

12時30分〓讃岐うどん接待(昼

インフォメーション

食

14時ごろ〓解散・散策

参加費 無料

主催〓公益社団法人日本山

岳会〓主管〓公益社団法人

日本山岳会四国支部〓協力

〓香川県山岳連盟、高知県山

岳連盟、徳島県山岳連盟、N

PO 法人剣山クラブ

※12日(土)夜は峰山公園中腹にある

ホテル「花樹海」で18時30分から

夕食懇親会(17時受付、夕食、ア

トラクションなど)を開きます。

(花樹海 香川県高松市西宝町

3丁目5-10 TEL 087-86

1-5580、費用は約8000

円)。希望者は宿泊施設を予約し

ます(費用は夕食懇親会・宿泊費

込み約1万7000円)。

※14日(月)は希望者(定員40人)で日

本三百名山の一座「三嶺(18

93m)」に登ります(バス代な

ど別途必要)。

申込み先 四国支部 3月上旬ま

でに郵便(〒770-0861

徳島市住吉5丁目8-75、尾

野方)、skk@jac.or.jp、

FAX 088-625-6215の

いずれかで。申込者には個々に

案内資料等をお送りします。

◆高尾の森づくりの会

春季イベント参加者募集

第14回「高尾の森」植樹祭のご案内

「高尾の森づくり」恒例の植樹祭

を下記のとおり開催します。春の

一日を精一杯楽しみましょう。

開催日 2014年4月13日(日)

集合 9時10分(開会式は9時15

分 小雨決行)

集合場所 小下沢ベース(八王子

市裏高尾町小下沢国有林

高尾の森小下沢ベース)

参加費 一般500円、大学生2

00円(法人会員、高校生

以下は無料)

募集人員 200人

申込み締切り 3月20日(定員に

なり次第締切るのでお早

めに!)

申込み先 龍久仁人

JACtakao@JACtakao.net

FAX 048(254)2852

◆編集後記◆

●今月号より、『山』は新体制とな
り、編集担当に原邦三さんが加わ
った。原さんは長らく山岳書籍を
作ってきた編集者だ。ほか、担当理
事として全体的なマネジメントをし
てくださり、校正・校閲も行なってい
るのが節田重節副会長。DTP編
集制作・印刷は、大阪にある双陽
社がやってくださっている。双陽
社は、本会会員であり学生の頃から
登山を続けていらっしやる方が経
営する会社だ。さらには会報編集
委員会があり、内容について意見交
換をしたり、また制作に協力してく
ださっている。これ以外にも帯封、発
送作業があり、事務局からも多大
なバックアップがある。会内外の方々
に記事を執筆していただいたあと、
紙面になるまでに実に多くの方々
が関わっている。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 825号

2014年(平成26年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 森 武昭
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

日本山岳会会員各位

編集の手違いにより、『山』2月号「インフォメーション」欄に下記の記事を掲載できませんでした。開催期日が迫っておりますので、折り込みにてお知らせいたしますので、ご覧下さい。

◆フォーラム 一登山を楽しくする科学Ⅵのお知らせ 科学委員会

- 日 時 3月15日(土) 13時～17時(受付12時30分～)
- 演 題 ①「南極観測の最新事情」国立極地研究所 石沢賢二氏
②「サポートタイツ」聖マリアンナ医科大学スポーツ医学助教 油井直子氏
③「山の姿を読むー谷川岳と大雪山」明治大学名誉教授 小疇 尚氏
- 場 所 立正大学大崎キャンパス 11号館 1151教室
- 定 員 先着200名 受講票は送付しません。定員オーバーの場合のみ連絡します。
- 費 用 500円(資料代)
- 申 込 Eメール、ハガキで

下田俊幸 (✉ tsimo-01@kc5.so-net.ne.jp 〒181-0011 三鷹市井口1-13-43)へ。

*立正大学大崎キャンパスへのアクセスは(<http://www.ris.ac.jp/access/osaki/index.html>)を参照。

会員及び科学委員会にご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げます。

会報編集委員会